

日本計量生物学会

ニュース・レター No.50

1995年1月

目次

巻頭言

日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会
日本計量生物学会1995, 96年度役員選挙結果について
国際研究集会参加報告
日本学術会議に関する報告
Biometricsの要約
1994年度第4回, 第5回理事会議事録
1995,96年度当選理事連絡会議議事録
Japanese Journal of Biometricsへようこそ!!
新雑誌JABESへの投稿のお誘い
会計理事からのお知らせ
事務局からのお知らせ
その他

佐藤俊哉 (統計数理研究所)

会員の皆様のご協力のおかげで、計量生物学会ニュース・レターも50号を迎えることができました。ニュース・レター巻頭言でもたくさんの方が生物統計家の育成、生物統計教育の必要性を述べられています。計量生物学会の広報を担当させていただいて、一人でも多くの方に生物統計学に興味を持っていただきたいと願っております。

アイザック・アシモフのSF小説にファウンデーション物とよばれるシリーズがあり、そのシリーズの中では心理歴史学 (psychohistory) という学問が中心的な役割を果たしています。心理歴史学は「個人の反応は予測できないが、集団としての反応は一定の確率で予測できる」という原理にもとづいて未来を予測する学問で、銀河大百科事典には“a profound statistical science”であると記載されています。私は中学1年のときにこのファウンデーションシリーズを夢中になって読み、ばく然とですが「統計ってすごいんだな」という刷り込みを受けたわけです。当時は（今でもそうかもしれませんが）士農工商SFなどとよばれたもので、SFばかり読んでいた私は親からしょっちゅう「SFなんてくだらないものばかり読んでないで、もっと勉強しなさい」と叱られていました。しかし、中学1年のときに受けた感動は、

現在の私と決して無縁ではないと思います。

昨年の8月にIBC'94がカナダのハミルトンで開催されましたが、そのときレセプション会場に向かうバスで、最近 Wiley から出版された Case Studies in Biometry を編集された Nicholas Lange さん一家と一緒にいました。余談ですが、Lange さんはこの編集が高く評価され、Biometric Monograph Series のエディタに選ばれています。Lange さんには中学生ぐらいの息子さんがいて、何と彼がアシモフのファウンデーションシリーズをバスの中で一心不乱に読んでいるではありませんか！ 私はもうすっかり「一言いわなければならぬ」雰囲気に取り憑かれてしまいました。「あーっ、キミキミ、君はアシモフの小説が好きなかね」、「はい」、「心理歴史学には興味があるかね」、「はい」、「おじさんは、中学生のときにファウンデーションを読んで今は生物統計学者になったから、君も将来立派な統計学者になりなさい」、「はい、そのつもりです」

このように、日夜後進の育成に努めているわけですが、日本計量生物学会の会員の皆さんも子供がSFを読んでいても決して怒らずに、むしろ「そんなくだらない本を読んでいないでSFを読みなさい」と積極的な指導をお願いしたいと思います。

生物統計学の教育と普及

1995年日本計量生物学会・応用統計学会合同年次大会のお知らせ

応用統計学会と日本計量生物学会は、これまで協力しながら実施してきた年会を1995年度からより積極的な合同年次大会にあらためて開催することになりました。それぞれの学会の枠にとらわれないご講演、ご参加をお待ちしております。

1. 日時：1995年4月21日（金）、22日（土）
2. 場所：国立公衆衛生院講堂
3. 参加費：正会員 2000円、 学生 1000円、 非会員 3000円
4. 特別セッション

テーマ：遺伝マーカー利用によるゲノムおよび生物集団の解析

オーガナイザー：鶴飼保雄（東大農業生物）

講演者および講演題目

矢野昌弘 農林水産省生物資源研

イネにおけるゲノム研究の進展

林 武司 東大農学部

ゲノム連鎖地図利用による量的形質の解析

岡崎登志夫 水産庁養殖研究所

淡水魚の遺伝子で探る日本の地史

5. 招待講演

講演者および講演題目（仮題）

柳川 堯 九州大学理学部

DNA鑑定の信頼性

柳本武美 統計数理研究所

推定方程式

6. 一般講演

- i) 申し込み方法：官製ハガキに氏名、連絡先（所属、住所、電話番号）、演題名を記入して、

〒106 港区南麻布4-6-7

統計数理研究所 駒澤研究室内

プログラム編成作業委員会

まで申し込みください。なお、発表者の少なくとも1名は日本計量生物学会または応用統計学会の会員である必要があります。これを機会にご入会いただければ幸いです。

- ii) 申し込み〆切：1995年2月24日（金）

- iii) 抄録集用原稿について

提出〆切：1995年3月24日（金）

講演申込者には、おって抄録作成要領をお送りいたします。なお今年度からページ数は全てA4用紙6枚以内となります。

プログラム編成作業委員会 上坂浩之、岩崎 学

日本計量生物学会1995, 96年度役員選挙結果について

標記の選挙結果について、選挙管理委員会より下記の報告がなされました。追加理事の選任は1994年12月9日開催の当選理事による連絡会議により行われました（連絡会議議事録参照）。

役員選挙結果報告

日本計量生物学会選挙管理委員会

委員長 金藤 浩司

委員 矢船 明史

- (1) 締切日 1994年10月31日
開票日 1994年11月8日
開票場所 統計数理研究所 金藤研究室
- (2) 有権者総数 347名
有効投票人数 82票
無効投票人数 3票
有効記名数 理事 245票
監事 78票
- (3) 選挙結果（当選人，五十音順），理事15名，監事2名

理事

上坂 浩之	魚井 徹	大橋 靖雄	奥野 忠一	折笠 秀樹
駒澤 勉	佐久間 昭	佐藤 俊哉	正法地 孝雄	高木 廣文
丹後 俊郎	椿 広計	林 邦彦	柳川 堯	吉村 功

監事

芳賀 敏郎 柳本 武美

国際研究集会参加報告

中村 剛（長崎大学医療技術短大）

国際環境疫学及び被曝解析学会（Joint Conference of International Society for Environmental Epidemiology and Exposure Analysis）が本年9月18日～21日に米国ノースカロライナ州リサーチトライアングルパークで35か国600余名の参加のもと開催された。会議の主テーマは「環境に帰因する死亡，疾病，傷害の理解を深める為の疫学的研究法と洗練された曝露量測定法の統合」であった。439件の発表がなされた。

総合シンポジウムのタイトルは「空気汚染の慢性的効果に関する疫学的研究の為の環境－個体混合デザインであった。又シンポジウムのタイトル

は「農薬の人体への影響の研究手法」，「人間行動のパターンと被曝量」，「環境汚染に対する遺伝的感受性」，「環境微粒子とその人命への影響」，「自動車公害」，「廃物とその健康への影響」であった。一方対象となった有害物質は，オゾン，カーボンモノキサイド，窒素酸化物，ベンゼン，鉛，農薬，騒音，微粒子，貴金属，油，煙草，石炭，ヒ素，塩酸，マグネシウム，紫外線，H⁺，アルデハイド，ウラニウム，PBB，すず，アスベスト，PCB，水銀，他であった。

本会議で特に問題となった論点は曝露量の推定値のみならず，その測定誤差も詳しく調査することが，人体への影響の大きさを推定する上で重要であることである。これが総合シンポジウムの主なテーマの一つであったと考える。総合シンポジウムでの報告は環境測定器の設置により該当地区

のオゾン、カーボンオキサイド等の大気汚染濃度を測定する一方で、その地区の児童3600人を10年間追跡調査し、個人レベルでの曝露量の測定並びに各種共変量の測定を繰り返し行い、大気汚染の長期に亘る影響を調査するものである。特筆すべきは小部分集団を設定してさらに詳しい測定を繰り返し行い測定誤差分布を求める計画を組んでいることである。研究費は数億円×10年ということであった。米国、カナダ、フランス等先進国の研究では汚染地域と非汚染地域の単純な比較ではなく、統計モデルを用いて量反応関係を求める方法が用いられる為、測定誤差は重要な問題であり、具体的に測定誤差分布を求めた報告もあった。

基調講演において、100年の歴史を持つ米国の医学会と公衆衛生学会が、環境疫学を研究するために、初めて公式の会合を持ったという報告が主催者よりなされた。各シンポジウムは生物統計学、疫学、曝露量解析の専門家、時には、物理学、工学の専門家も含む大規模なプロジェクト研究の報告であった。環境問題は学際的な取り扱いが必要であることを再認識した。

日本学術会議に関する報告

日本学術会議会員 藤井光昭

日本学術会議第120回（第16期第2回）総会、部会、常置委員会等は9月28日から9月30日まで開催されました。詳しい報告は日本学術会議から学会あて送られてくる報告書をご覧くださいことにして、私が関係したものを中心にごく簡単に報告させていただきます。

まず、総会関係では

1. 環境法学・環境政策学研究連絡委員会（第2部世話担当）の新設を承認。
2. 多極分散型国土形成促進法に基づき、日本学術会議は平成10年度を目途に、横浜市みなとみらい21地区32街区へ移転することになりますが、そのための移転準備委員会の設置を承認。
3. 第16期重点課題として、以下を承認。
（1）21世紀に向けての新しい学術の動向、（2）

学術研究体制の整備、（3）科学者の地位と社会的責任、（4）学術情報・資料の充実・整備、（5）国際学術交流・協力の推進、（6）高齢化社会の多面的検討、（7）生命科学の進展と社会的合意の形成、（8）学術と産業、（9）地球環境と人間活動、（10）脳の科学とところの問題、（11）アジア・太平洋地域における平和と共生、（12）グローバリゼーションと社会構造の変化

4. 第4部としても活動計画を検討し、（1）新しい方式の国際研究所（国内外からの客員研究員で行う。数理科学国際研究所（仮称）など）の実現を図る小委員会、（2）科学教育の振興と人材育成小委員会、（3）サイエンス・ミュージアム勧告小委員会が設置され、私は統計学と関連がある可能性もあるのではないかと考え、（2）に属しました。
5. 第4部では統計学からの会員は第5常置委員会（学術情報・資料）に属する慣例とかで私も属することになりましたが、公文書館の整備や学術研究情報ネットワークの整備等が活動計画に入っています。
6. 学術研究団体が増加し、学術会議の会員推薦手続きに問題点が多く、検討が進められています。
7. 各学会から推薦いただいた方々による統計学研究連絡委員会は任期が本年10月21日からとなり、第1回目の会合は11月中～下旬を予定しています。

Biometricsの要約（Vol.50, No.1）

“Nonidentified Responses in a Proportional Hazards Setting (pp.1-10)”

D.R. Hoover and Y. Hu

例えば、AIDSによる死亡とある共変量（CD4カウントなど）との関連を推定する場合、死因がAIDSであると同定できないケースを解析にどのように考慮するかという問題を扱う。

このように原因が同定できない反応の全てが、観察された反応（AIDS死）と独立に発生するという保証はない。従って、time-to-responseデータを解析する際、これらのケースを独立なセンサリングと扱うことができず、通常の解析手法の適用は困難となる。また、反応の誤分類、関心のある反応と関連する脱落などによっても同様に独立でないセンサリングが発生する。

このような独立でないセンサリングを nonidentified response (NR) センサリングと呼ぶ。通常、NRセンサリングと独立なセンサリング (IC) とは観察データ上で区別できない。

そこで、以下を仮定したモデル (NR/ IC 比例ハザードモデル) により同定されないものを含めた真の反応と共変量との関連を推定する方法を提案する。

- ・ 観察された反応及びセンサリング (IC) と共変量の間の比例ハザード性。
- ・ 真の反応はある確率で同定されない。観察された反応のハザードと同定されない反応のハザードの比は一定
- ・ 真の反応とセンサリング (IC) のハザード間の比例関係 (時間依存でもよい) パラメータの推定は条件付き部分尤度法で行い、
- ・ 反応が NR センサリングとして観察される確率
- ・ センサリングとして観測されたある対象が実際は反応である確率

などを推定する。

The Baltimore Study to Help the AIDS Research Effort (SHARE) の AIDS-free HIV-1 感染男性 400 人のデータを用い、AIDS 死と共変量 (CD 4 カウント) との関連を推定した。

- ・ 同定されない反応を統計的に検出する
- ・ パラメータ推定を改善する
- ・ 基礎ハザードの推定を改善する
- ・ センサー症例に実際は真の反応であったという確率を割当て

という面から、このモデルは有用であると考え

手良向聡 (三共株式会社)

Biometricsの要約 (Vol.50, No.2)

“Monitoring Pairwise Comparisons in Multi-Armed Clinical Trials (pp.325-336)”

D.A. Follmann, M.A. Proschan and N.L. Geller
「多群比較試験の対比較によるモニタリング」

多群比較試験を群間の対比較によりモニタリングする方法をこの論文は提案している。治療群の継続、あるいは試験全体の継続の可否に関する決定を行うため、試験途中において対比較検定統計量により検討する。2 群の場合の Pocock (1977), O'Brien and Fleming (1979) や Lan and DeMets (1983) による群逐次検定法を多群比較試験の場合に拡張することにより、第 I 種の過誤率を制御する。これらの方法は Dunnett や Tukey の多重比較法の拡張となっている。逐次棄却型多重比較法による群逐次検定の拡張や Bonferroni の不等式による簡便な近似法も提案している。

[結語において、著者達も述べているように多群の場合の群逐次検定はまだあまり研究されておらず、従って、今後このような研究が増えてくるものと思われる。]

吉田道弘 (武田薬品工業)

“Flexible Maximum Likelihood Methods for Assessing Joint Effects in Case-Control Studies with Complex Sampling (pp.350-357)”

S. Wacholder and C.R. Weinberg
「複雑なサンプリングのもとでのケース・コントロール研究で同時効果を評価するための融通のきく最尤法」

ケース・コントロール研究は、頻度マッチング、ランダム化登録、層別サンプリング、二段階サンプリング、などの方法でより効率的に実施することができる。これらのデザインは 2 つの性質を共有している：1 つは、全対象者について何らかの「第 1 段階」変数を調べ、全ての変数を調べるのは選ばれたサブサンプルだけであり、もう 1 つは、「第 2 段階」変数を調べるための対象者のサブサンプリングは、疾病発生状況と第 1 段階変数に同時に依存している、という点である。第 1 段階の

変数がサブサンプリングの割合を変えてしまうので、標準的な解析では第2段階変数と第1段階変数の全ての同時効果を乗法モデルとして特定する必要がある。我々は、欠測データ解析の方法を用いて、第1段階と第2段階変数の交互作用が乗法モデル以外で特定化されても、興味のあるリスクパラメータの最尤推定値が得られることを示す。加法モデルも乗法モデルも許すので、同時効果は自由にモデル化できる。年齢、性、喫煙状況と肺がんとの関係を調べるケース・コントロール研究の予備的データを例として用いて、年齢と喫煙の同時効果には乗法モデルが当てはまることを示す。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Coherence in Observational Studies (pp.368-374)”

P.R. Rosenbaum

「観察研究での一貫性」

治療と結果の間の関連の一貫性（疾病の自然史や生物学的な知見と矛盾しないこと）は、関連が因果であるかどうかを判断するために重要であるといわれている。ここでは一貫性のある関連が観察されたときに、その証拠を数量化する一方法を提案する。まず、関連に一貫性があるかどうかを検出するための検定を提案する。この検定は、Mann-Whitney, Wilcoxon, Gehanの検定の一般化になっている。次に、測定されていないバイアスに対する検定のsensitivityを調べる。ここで調べたいことは、関連に一貫性があれば測定されていないバイアスの影響を受けにくいかどうかである。有機水銀曝露とクロモソーム異常のデータを詳しく解析する。

佐藤俊哉（統計数理研究所）

“Maximum Likelihood Estimation of the Proportion of Congenital Malformations Using Double Registration Systems (pp.433-444)”

R.T. Lie, et al.

「複数回登録システムを用いた先天性奇形割合の最尤推定」

ノルウェーでは1970年以来、国レベルでの医療出産登録（Medical Birth Registry）のデータに

基づいて先天性奇形の疫学調査が行われている。この報告に内在する問題を明らかにするために、Hardaland countyでは1985年に上記とは別の地域症例登録が開始された。この論文では様々な奇形の有病割合を推定するために、このような2つの登録簿のデータを用いたdouble sampling estimatorを考える。ここで特に取り上げる例はダウン症、中枢神経系の奇形、唇裂、口蓋裂、尿道下裂である。ここで適用する方法はそれぞれの登録の登録割合の推定にも利用可能である。また、double sampling estimatorの漸近分散を与え、登録が不確かな場合にこれらの値を用いて有病割合の真の変化が検出できる可能性について議論する。医療出産登録のみに基づく粗推定量とdouble sampling estimatorを比較し、double samplingの利点を評価する。最後にdouble samplingに対するfully parameterize modelを導入することによって推定に用いた仮定の評価を考える。

訳者注：同じ対象者を複数回samplingすることによって誤分類確率と有病割合の推定値を同時に与えている。ただ、置いている仮定が強い場合しか考えていない（診断の特異度が常に1や、2回の診断を行った後では誤って疾病なしと分類された対象者はいないなど）。実際に用いるにはもっと広い状況での推定量の挙動を調べる必要があると思われる。

山本精一郎（東大疫学・生物統計学）

“M-Estimation in Cross-Over Trials (pp.486-493)”

E.M. Chi

「クロスオーバー試験におけるM推定」

クロスオーバー試験データにおいて、個体内誤差あるいは個体差に異常値が含まれている可能性がある場合に対して頑健な、結合M推定という方式を提案する。処理の直接効果の対比および持越効果の対比の結合M推定値の平均平方誤差の諸性質をシミュレーション研究により調べる。個体内誤差や個体差に異常値が存在する可能性のあるとき、結合M推定値は、一般化最小二乗推定値より、平均平方誤差の観点からは優れていることが知られる。

本論文では、処理効果の個体内比較デザインとしてのクロスオーバー試験（1次の持越効果の推

定を可能とするクロスオーバー試験, BIB, ラテン方格等も含む) について, 線形モデルのパラメータの推定に, 個体内情報に基づく M 推定値と個体間情報に基づく M 推定値の加重平均として結合 M 推定値 (CME) を求める方式を提案している。

この推定値を, 個体内情報のみによる最小二乗推定値 (LSE), 個体内と個体間のそれぞれの最小二乗推定値の個体内・個体間分散推定値を用いて重みづけした推定値 (GLSE) と比較している。比較はシミュレーションにより, 2 処理比較に関する 3 種のデザインの処理効果の対比と持越効果の対比について, 平均平方誤差により比較している。また, CME による各対比の 95% 信頼区間が真値を含む頻度を求め, CME の分散推定値の妥当性も評価している。

上坂浩之 (ヘキストジャパン)

"Time Series Models Based on Generalized Linear Models: Some Further Results (pp.506-511)"

W.K. Li

「一般化線型モデルに基づく時系列モデル: さらなるいくつかの結果」

この論文では古典的な移動平均モデルを条件付き分布が一般化線型モデルの形で与えられた時系列モデルに拡張する問題を考える。これらのモデルを構成することは容易でその推定も簡単である。統計的モデル化の方法についても提案する。この方法論を例示するためにいくつかのシミュレーションの結果と実例を報告する。このモデルは経時観察データの解析に応用可能であろう。

松山 裕 (東大疫学・生物統計学)

"The Intraclass Correlation Coefficient: Distribution-Free Definition and Test (pp.517-526)"

D. Commenges and H. Jacqmin

「級内相関係数: 分布に依らない定義と検定」

変量効果モデルの一般的なクラスに基づいて級内相関係数の定義を与える。通常の級内相関係数と 2 値データに対するクラスター間の相関係数は両方とも, 一般化された係数の特殊な形である。指数型分布族における帰無仮説: 級内相関係数

$=0$ のスコア検定を導く。統計量は指数型分布族の範囲内では特定の分布に依存せず, ペアでとった相関係数と関連がある。検定は説明変数に対する調整が可能である。

小田英世 (東大疫学・生物統計学)

"Statistical Implications of the Choice Between a Dichotomous or Continuous Trait in Studies of Interobserver Agreement (pp.550-555)"

A. Donner and M. Eliasziw

「観察者間一致性の研究における 2 値・連続変数の選択の統計的意味」

研究の計画の際によく起こる疑問は, 関心のある特性を連続尺度で測るべきか, 2 値尺度で測るべきかというものである。この疑問に潜在的に関連のある問題は, その測定の結果的な信頼性に集中している。連続的な特性が正規分布に従うと仮定して, 母信頼性係数がある特定の基準値に等しいかどうかの検定に必要な対象者数に基づくこの決定の影響を定量的に示す。2 つの場合について研究する。連続的な反応と真に 2 値の反応との間の選択と本質的には連続的な反応を 2 値化した場合である。両方の場合で, 特に後者の場合に, 特性を 2 値尺度で測定すると常に検出力の損失が大きいことを示す。

小田英世 (東大疫学・生物統計学)

1994年度 第 4 回理事会議事録

日時: 1994 年 7 月 25 日 (月) 12 時 ~ 13 時 10 分

場所: 日本都市センター 第 8 会議室

出席者: 駒澤 (会長), 魚井 (会計), 高木 (庶務) 佐藤 (喬) (会計補佐), 上坂, 鶴飼, 大橋, 奥野, 折笠, 岸野, 佐久間, 佐藤 (俊), 柴田, 正法地, 丹後, 椿, 橋本 (以上, 理事), 栗原 (事務局)

議事次第

1. 第 2 回および第 3 回理事会議事録の確認について

第 2 回および第 3 回理事会議事録について報告があり, 承認された。

2. 第 2 回計量生物セミナーについて

上坂企画担当理事から, 第 2 回計量生物セミナ

ーについて説明がなされた。12月4日(日),5日(月)富士教育研修所で「医学と統計学の対話ー用量反応情報をめぐってー(案)」というテーマで行う予定である。演者には統計関係5名,臨床関係5名,企業関係1名の総計11名を考えている。参加費は3万円を予定しているが,参加人数,講演時間などの詳細とともに,今後検討する予定である。オーガナイザーは未定であるが,佐久間理事が適任であるので,上坂理事と調整を図ることとなった。

3. 1995年度年会特別セッションについて

次期年会は4月20日(木),21日(金)に国立公衆衛生院で,応用統計学会と連合で行う。応用統計学会には,7月26日(火)の統計関連連合委員会で報告し,了承を得る必要がある。

次期年会での特別セッションのテーマとして,鵜飼理事案として生物・農学関係で3テーマと演題名,演者などが報告され,田崎理事案として水産・農学関係について2テーマが紹介された。これらのテーマ,演題等を参考に上坂企画担当理事が検討することになった。

4. 学術会議統研連委員について

前回の選挙で,学術会議会員には藤井氏(東工大)が選出された旨,柴田理事より報告がなされた。また,次期統研連の委員の選出は,従来通り東京周辺の理事よりも,遠距離の理事である柳川理事,柴田理事のどちらかになって頂くことになり,両氏の話し合いにより決めて頂くこととした。

5. 次期IBCのInvited Sessionについて

今回のIBCのInvited Sessionのテーマ等について,IBC本部から丹後理事に企画の依頼がきているので,国際担当理事,Council memberとともに,提案内容を検討する事になった。ISI(北京)での日本でのサテライト・ミーティングなども同様に,検討してもらうこととした。

1994年度第5回理事会議事録

日時:1994年11月18日(金) 18時~20時

場所:統計数理研究所 特別会議室

出席者:駒澤(会長),高木(庶務),佐藤(喬)(会計補佐),上坂,鵜飼,大橋,奥野,佐久間,佐藤(俊),柴田,丹後,椿,橋本,吉村(以上,理事),金藤(選挙

管理委員長),栗原(事務局)

議事次第

1. 第4回理事会議事録の確認について

前回議事録について報告があり,承認された。

2. 1995・1996年の役員選挙結果について

金藤選挙委員長から,役員選挙の結果,理事15名,監事2名が選出されたとの報告がなされた。

3. 統計関連連合大会実行委員会について

駒澤会長から標記委員会の議事録をもとに説明がなされ,議事録の一部修正が行われた。作業委員会での独立採算性について了承された。また,IBSへ送る英文サマリーは,本学会に所属していなくてもよいのではないかと意見があり,作業委員会で検討することになった。

4. 各委員会報告について

・丹後理事から雑誌の編集状況について報告があった。

・上坂理事から,第1回計量生物セミナーのプロシーディング作成状況について報告があった。第2回分について,雑誌に掲載することの可能性が議論された。Guest editorを責任者とすれば,掲載は可能であるということになった。

・柴田理事から,11月18日の第1回統計学関連研究連絡委員会について報告があった。藤井委員長に統計関連連合大会実行委員会の情報を提供した方がよいのではないかと意見が出されたが,廣津議長の判断に委ねることとした。

5. 1995年度の年会「特別セッション」の企画案について

配布資料をもとに鵜飼理事から,テーマは「遺伝マーカー利用によるゲノムおよび生物集団の解析」とし,3演題で行うとの説明があった。特別セッションと特別講演(応用統計学会)という名称で区別するのは,連合大会としてはおかしくないかと質問があったが,次期大会はこの呼称で区別して行うことになった。特別セッションの解説はニュース・レターの巻頭言に掲載するが,プログラムにも説明(解説)を掲載することになった。

6. 次期Council member候補者について

持ち回り理事会の結果,次期Council memberの候補者に,柳川理事,丹後理事が選出された旨,駒澤会長から報告があり,了承された。

7. その他

・ 会員から新雑誌JABESの購読についての質問状があり、これに対して吉村理事から、一定期間は無料配布されるが、その後の価格等は確定していないとの説明があった。

・ 文部省から科研費についてのアンケートがきているので、12月15日までに提出することになった。

・ 佐藤（俊）理事からニュース・レターとBiometricsのサマリーの担当を別にして欲しいとの申し出があり、新理事会で検討することになった。

・ 次回は、12月9日午後5時30分より統計数理研究所特別会議室で開催する。

当選理事による連絡会議議事録

日時：1994年12月9日（金） 18：35～19：35

場所：統計数理研究所 特別会議室

出席者：駒澤（会長）、高木（庶務）、上坂、岸野、佐久間、佐藤（俊）、椿、吉村（以上、理事）、栗原（事務局）

議事次第

1. 推薦理事5名の選出について

日本計量生物学会役員選出に関する細則の12条に基づき、以下の推薦理事5名を専攻分野と地域特性を考慮して選出した。選出された方々は、鵜飼保雄（東京大学農学部）、越智義道（大分大学工学部）、佐藤喬俊（クインタイルズ・アジアリンク）、柴田義貞（放射線影響研究所）、野沢昌弘（東京理科大学経営学部）。

2. 各理事の役割分担について

新理事の役割分担について話し合った。

3. その他

・ 第3回計量生物セミナーを来年8月以降に行う予定である。

・ 新理事会は平成7年1月20日（金）18：00から行う（場所は未定）。

Japanese Journal of Biometricsへようこそ！

本学会雑誌であるBulletin of the Biometric Society of Japanの名称がVol.13から「Japanese Journal of Biometrics」へと変わり、体裁、内容も少々新しくなりました。その主なねらいは、会員のためになる、会員相互間の研究交流をより一層促進するための雑誌をめざすことにあります。そのため、投稿原稿の種類を次の5種類としました。

1) Original Articles（原著）

計量生物学（Biometrics）分野での諸問題を扱う上で創意工夫をこらし、理論上もしくは応用上価値ある内容を含むもの。

2) Reviews（総説）

あるテーマについて過去から最近までの研究状況を解説し、その将来への課題、展望についてまとめたもの。

3) Preliminary Reports（研究速報）

原著ほど、まとまっていない、あるいは、独創性ははっきりしないが、なんらかの創意工夫がこらされているもの。また、年会で発表された論文（招待講演、一般講演とも）で、原著として投稿するほどまとまっていないもの。

4) Consultant's Forum（コンサルタント・フォーラム）

会員が現実に直面している具体的問題の解決法、または、新しい方法論を開発した会員がその適用場面を模索する、などに関する質問。編集委員会はそれを受けて、適切な解答例を提示、または、討論を行う。なお、質問者（著者）名は掲載時に匿名も可とする。

5) Letter to the Editor（読者の声）

雑誌に掲載された記事などに関する質問、反論、意見。

この中で、特にPreliminary Reportsについては、未完成の論文掲載を目的として、「とりあえず、preliminary reportとして報告しておき、後に改訂して、他雑誌（Biometricsなど）」へ投稿したい」と考えている会員のために設けたものです。また、Consultant's Forumは、現実問題を通して、アプローチの方法、解決方法の模索など、会員相

互間の交流の場として、活発に利用されることを期待して設けたものです。

ただ、本学会は、International Biometric Societyの日本支部としての性格上、記事のタイトルはこれまで通り英文で統一することになっていますが、本文は和文、英文いずれでも構いません。なお、投稿に際しては、新しく改訂となった投稿規定、原稿作成要領（Vol.13, No.1から）を参照して、学会事務局編集委員会宛お送り下さい。

Japanese Journal of Biometrics編集担当理事
丹後俊郎

新雑誌JABESへの投稿のお誘い

新雑誌 Journal of Agricultural, Biological and Environmental Statistics (JABES) が American Statistical AssociationとInternational Biometric Societyとの共同編集で1996年に刊行されます。JABESは、農学、バイオテクノロジー、環境資源などの生物科学の諸分野への統計を強調します。投稿規定等は、下記までご連絡ください。

Dallas E.Johnson, Editor
Department of Statistics
Kansas State University
Dickens Hall
Manhattan, KS 66506-0802
U.S.A.
e-mail : DEJOHNSN@KSUVM.ksu.edu

会計理事からのお知らせ

1995年度の会費の納入をお願い致します。本学会の会計年度は国際計量生物学会の会計年度に合わせて1-12月です。B会員およびC会員に対して、一カ年会費を未納にした会員は規定に従い雑誌Biometricsが届かなくなります。本学会の運営を健全にするためにも、これまでに会費を未納にしている会員は、本年分と合わせ至急会費をご納入下さるようお願い致します。

開発途上国援助のための「特別会費」は、会費に2,000円上乗せをお願い致します。なお、特別会費を送金される場合にも通常の会費納入口座を利用し、特別会費であることを通信欄に明記して下さい。

さい。詳しくは、ニュース・レターNo.48巻頭言をご覧ください。

会 費	1995年度	1994年度
A 会員	3,500円	3,500円
B 会員	8,000円	8,000円
C 会員	4,500円	4,500円
特別会費*	2,000円	2,000円

*A, B, C会員会費に2,000円上乗せして下さい。

郵便振替口座：変更がありました

00150-2-22365 日本計量生物学会

銀行振込口座：

第一勧業銀行飯田橋支店

普通 061-1499027

日本計量生物学会

または、

三和銀行 飯田橋支店

普通 624-3596166

日本計量生物学会

会計担当理事 魚井徹、佐藤喬俊

事務局からのお知らせとお願い

学会への連絡、問い合わせ等は下記事務局までお願いします。

また、所属、連絡先等に変更のあった会員の方は、事務局まで御一報下さい。

ニュース・レター編集委員会からのお願い

編集委員会では会員からの原稿を募集しています。国内・国外での関連学会への参加報告や印象記、海外での研究・活動状況などの報告を歓迎します。

以下の方々には、ニュース・レターNo.47-50でBiometrics誌サマリー翻訳にご協力いただきました。ご協力を感謝いたします。

井村伊久子 東大疫学・生物統計学

祝前博明 新潟大学農学部
 上坂浩之 ヘキストジャパン
 小田英世 東大疫学・生物統計学
 折笠秀樹 富山医科薬科大
 金藤浩司 統計数理研究所
 岸野洋久 東大教養学部
 小西貞則 九州大学理学部
 佐藤俊哉 統計数理研究所
 手良向 聡 三共株式会社
 橋本修二 国立公衆衛生院
 浜田知久馬 東大薬剤疫学
 林 邦彦 山之内製薬臨床統計部

比江島欣慎 総合研究大学院大学
 藤井良宜 宮崎大学教育学部
 松山 裕 東大疫学・生物統計学
 村上義孝 東大疫学・生物統計学
 山本精一郎 東大疫学・生物統計学
 吉田道弘 武田薬品工業

Biometricsに掲載された論文の日本語要約は会員の方々のボランティア活動に依存しています。編集委員会から要約の依頼がありましたら、ご多忙中とは思いますが、御協力を宜しくお願い致します。

日本計量生物学会事務局
 〒106 東京都港区南麻布 4-6-7
 統計数理研究所駒澤研究室内
 TEL 03 (3446) 1501
 栗原恵美子

編集委員会 佐藤俊哉, 橋本哲男
 〒106 東京都港区南麻布 4-6-7
 統計数理研究所
 TEL 03 (3446) 1501
 FAX 03 (3446) 1695